

2016.10.16 年間第29主日

めげずに訴えつづけよ

ルカ 18章 1-8節

18:1 イエスは、気を落とさずに絶えず祈らなければならないことを教えるために、弟子たちにたとえを話された。

18:2 「ある町に、神を畏れず人を人とも思わない裁判官がいた。

18:3 ところが、その町に一人のやもめがいて、裁判官のところに来ては、『相手を裁いて、わたしを守ってください』と言っていた。

18:4 裁判官は、しばらくの間は取り合おうとしなかった。しかし、その後に考えた。『自分は神など畏れないし、人を人とも思わない。

18:5 しかし、あのやもめは、うるさくてかなわないから、彼女のために裁判をしてやろう。さもないと、ひっきりなしにやって来て、わたしをさんざんな目に遭わすにちがいない。』」

18:6 それから、主は言われた。「この不正な裁判官の言いぐさを聞きなさい。

18:7 まして神は、昼も夜も叫び求めている選ばれた人たちのために裁きを行わずに、彼らをいつまでもほうっておかれることがあるだろうか。

18:8 言うておくが、神は速やかに裁いてくださる。しかし、人の子が来るとき、果たして地上に信仰を見いだすだろうか。」

説教

ルカの18章は信仰についての教えが、5つのたとえで示されます。きょうのたとえはその中の一番目で5つのなかでもわかりづらいというか、とりわけヘンな話に感じます。

きょうの福音をたとえ話の箇所抜きで読んでみるとこの「わかりずらさ」の一面がはっきりしてきます。たとえの中身、2節から6節を抜いて、1節のあと7,8節（地の文になります）だけを取り出してみると、気を落とさず絶えず祈りなさい、神は速やかに裁いてくださる、と書いてあります。これが

結論だとすると「たとえ」の内容とかみ合わないのです。

イエスが話されたたとえは「神を畏れず、人を人ともも思わない」裁判官でもしつこく訴えにいけば、やもめの訴えでも聞きいられるという話しです。たとえに出てくる裁判官は「すみやかに裁く」どころか、しぶしぶと、うるさくてかなわないから裁くとなっています。しつこい訴え、しぶとい祈りを神は聴き入れる？ ちぐはぐしています。結論とたとえがぜんぜんかみ合わない、違和感があります。

イエスのことばとして伝わった「たとえ話」の内容が福音書が作成された頃には誰もよくわからなくなっていた？ だからこのような辻褃があわない話となって記録されたんじゃないかという解釈があります。18章に記されたほかのたとえ話は最初は違和感を感じますが、そのあとなるほどと納得できます。しかし、しょっぱなに記録されたこの「やもめと裁判官」のたとえは違和感が残り、なかなか理解ができない手ごわい福音です。そこで二つほど補助線を引いてみます。

(1) 『天使にラブ・ソングを…』(1992年アメリカ)という修道院を舞台にしたミュージカル仕立てのコメディ映画があります。その中のシーンに修道女たちが飛行士を拝み倒してタダで飛行機に乗せてもらうという一幕があり、祈りをパロットたおもしろい場面として記憶に残っています。この「拝み倒し」というところが一点目。

(2) 年をとるとなにをするにもおっくうになる、だから年寄りに頼みごとがあつたらしつこく何度でも頼まないとやってくれないよ、というエッセイを読みました。『老いの越え方』(吉本隆明 朝日文庫)自分も若いときに老教授に就職をたのんだことがあって、その頼みは聞いてもらえたのだが、そのあとその教授から足が遠のいてしまった。たまたま教授にあつたときにお前は頼み

ごとがあるときにだけ顔をだして、と小言をいわれたことがある、と続いていました。「しつこく」頼めというのが二点目。

一種の世間知、世渡りの知恵みたいなものですが、深い人間洞察があるなあと感じ、見習おうと思いました。

裁判官は善悪を裁く権力者ですから、そういう人に頼みごとをするなら「しつこさ」が決め手になる、この「やもめと裁判官」のたとえをこのように理解するとなんとも月並みですが、この月並みなところにこそ、信仰の極意があるような気がしています。イエスのたとえ話に違和感を感じる時、これがわたしたちがもっている考え（常識であったり、キリスト教信仰であったり、その他いろいろ）に対してイエスが突きつけた問いなのかなあ、と思います。

ことばにするとこの福音の味わいが月並みになってしまいそうなので、イメージでしか伝えられないのですが最後にもう一つだけ。

わたしは最近、近所の幼稚園に用事があってしばしば行きます。そこは教会が運営する幼稚園で古いけれど立派なチャペルがあり、行った時にはチャペルによって主にご挨拶のような、短い祈りをします。そのチャペルにはいつも一人か二人は祈りをささげています。わたしがお見かけするところどうも同じ人のように見えます。福音ではやもめはひっきりなしに裁判官のところに行って訴えています。チャペルで見かけるこの方とこのやもめを重ねてしまうのは失礼だとは感じますが、とどのつまり祈りは訴えであり、訴えは祈りなのかもしれません。

「イエスのことば」を人のことば、特にわたしのことばで説明することにむなしさを感じたので、イメージをお伝えしました。

イエスの母マリアはイエスのことばを聞いてよくわからないときでも深く胸にしまっておいた、と伝えられています。イエスのたとえが奇抜でヘンに思えても、逆にヘンで奇抜だからこそ読んだ人の心にあとあとまで残るのでしょう。その狙い通りにきょうの福音を聞いた一人ひとりのこころに残りますように。
